
雅雄記？

いかすみ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雅雄記？

【Nコード】

N7984K

【作者名】

いかすみ

【あらすじ】

事故で異次元に飛ばされた雅雄と楓
運命は2人を簡単に死なせてはくれなかった。
新たな世界で雅雄が活動する。
そして奥義書の行方は？

プロローグ（前書き）

雅雄記の続編です。

プロローグ

プロローグ

本来なにも存在しないはずの異次元空間。

そこにありえない意識が存在していた。

偶然の弾みで迷い込んだ2人の意識だ。

死の瞬間とっていい。

肉体は分解したのだが意識は存在した。

そのまま意識を保ち続けることは難しかった。

それはその異次元空間が2人の意識を排除しようとしていたからだ。

そのための出口はすでに作られていた。

ただ出口から出ればたちまち消滅が待っている。

意識が保てるのは肉体があるからだ。

それともう一つ問題があった。

楓の意識は生存を拒否していたからだ。

異次元空間中では消滅ができない。

楓のためにそこから出るしかなかった。

楓は長生きはしたが本来は人間だ。

雅雄が望むから千年生きた。

それは人間にとって苦行でもあった。

その間に数百人との子供や孫、子孫との別れを経験していたのだ。

その悲しみの累積は彼女に重くのしかかった。

並みの人間には耐えられない苦痛だ。

そんな経験はもうしたくないという思いだ。

雅雄にはその苦しさが判るだけになにもいえなかった。

雅雄は楓の望みを引き受ける意味で融合を図る。

異次元空間で動けない楓を導くためだ。

それは動けない人間を抱えて動くに等しい自然なことだった。
だが肉体の境目の無い意識体だったため融合してしまった。

精神的に強い雅雄だったのだから、しっかりした自我は確立していた。
そして、楓の意識を吸収してしまう。

2人分の精神構造を持つ雅雄の誕生したときだ。

しかし、出口から出てしまえば肉体はないのだから存在が消える。

しばしの存続に2人は一緒にという思いもあった。

2人分の意識を抱えて雅雄は出口に向かって動き出した。

ただ、異次元空間は人間界のいつに繋がっているのかは不明だった。
こうして一度死んだ二人は異次元で一緒になり地上へ戻った。

そこで今度こそ本当の死を迎えるためだった。

しかし、運命はそんなに甘くなかった。

桔梗の日記（前書き）

雅雄を作った桔梗

そして、研究結果をまとめた日記

本来はこっそり雅雄に渡す予定のものが手違いで公表されてしまう。
それが波紋を広げていく。

桔梗の日記

桔梗の日記

桔梗は雅雄に研究を引き継ぐ予定だった。

だが雅雄に託した研究の大変さは桔梗自身が知っていた。

一口に気の研究といっても聞き取り調査だけでも時間がかかる。ましてその実体は経験できなければどうしようもない。

そして、雅雄が生存中に終わらないと読んでいた。

そのため、一度だけ雅雄を助ける為スペアの人形を用意した。

これは雅雄に秘密で手配していたことだ。

ただ桔梗の知らないところで雅雄も独自の気の研究結果をまとめていた。

それは自身が気を使えることによるものだった。

雅雄自身この頃はまだ自覚というものがなかった。

命令には忠実にという頃だった。

そのため、聞かれなければ答えないという状態だった。

桔梗もまさか雅雄がすでにそんなレベルに達しているとは知らなかった。

その誤解ともいう意思疎通の無さがお互いの研究成果を阻んでいた。桔梗の結果を雅雄に完全に教えておけばその時点で桔梗の研究は完成していた。

研究結果のほとんどは雅雄に引き継いだが奥義書の研究成果の一部は教えなかったのだ。

万が一というわけではないが雅雄が自己増殖をできないよう制限をかけたのだ。

それは杞憂だった。

しかし、研究者として自分の研究結果で世界が減ぶことを防ぐため

の安全な処置だった。

それは、雅雄が老化したとき自分のコピーは作れなくする処置だった。

そついう封印を仕掛けておいた。

雅雄も人形だ、いつかは年を重ねて使い物にならなくなるときがある。

そのためのスぺア人形のつもりだった。

ただ、そのままでは人形が老化してしまい使い物にならなくなる。

そのための保存方法として人形そのものを凍結する方法をあみ出した。

それは、気による凍結で実験機の方法を流用したものだ。

将来、雅雄なら絶対に私の日記を調べると確信していた。

そして、その人形の解除方法を記しておいた。

気の器は今回はなぜかうまくつくることが出来なかった。

オリジナルの気の器はまさに偶然が作用してうまく出来たものだと痛感した。

そのため、気の器は組み込めなかった。

だがそれ以外のものは出来る限り同じものを用意したつもりだった。

あの奥義書を解析した刺青まで組み込んでおいた。

あとは、雅雄が気付いてくれさえすればよかった。

そのため連絡員を手配したのだが空振りで帰って来た。

どこかの秘密の研究所に入ってしまったようだ。

桔梗は自分の寿命が限界なのを知っていた。

そこで、日記を厳重に保管して少々の災害でも壊れない金庫に納めた。

そして雅雄だけに読める暗号を日記と研究室の壁紙に張り付けておいた。

こうして桔梗はその生涯を閉じた。

この時点で雅雄が奥義書の解読結果を知っていたら桔梗は若返り処理を受けられたのだ。

しかし、その情報は桔梗の死と共に消えてしまう。

雅雄がその情報を独自に解析するのはもっと先のことだった。

雅雄はひたすら研究を進めていた。

桔梗の使いが来たときは偶然次元変換装置の作動中だった。

そのため、目の前に使いの者や桔梗がいたのに触ることが出来なかった。

しかし、置いていったメモを読みその意図は把握していた。

そしてメモはそのまま引き出しにしまった。

そのころには自分が年をとらない理由も判っていた。

当然それは予備の体の意味を無くしていた。

そのため、桔梗の用意した体は必要なかった。

そしてメモは引き出しのおくにしまったまま年月を過ぎていく。

それから、50年。

研究を重ねて迷いの森システムを完成させる。

そして、設置に動く。

それを設置後、雅雄は緊急信号で過去へ飛び立った。

飛び立つ前に研究施設には気の防御は仕掛けておいた。

泥棒が入れないようにという意味のつもりだ。

そのため、桔梗の子孫については対象外とした。

雅雄が旅立って100年後に人間同士の戦争がおこった。

それは魔法大戦と呼ばれ星を落とす魔法まで使われた戦いだ。

地上の施設は大半が灰燼と化した。

それだけの攻撃になお耐え抜いた雅雄の研究施設。

建物は健在なので多くの難民が近づこうとするが進入できなかった。

戦後の技術者はその秘密を探ろうとした。

その中にたまたま桔梗の子孫が居たので入ることが出来た。

そして、雅雄の施設に侵入して資料をあさっていった。

雅雄も必要な研究は暗号化していた。

さらに、重要な資料は記憶していたから問題はなかった。

ただ重要と思わなかった桔梗のメモは回収されていった。

そのメモから桔梗の日記は俄然注目を浴びた。

原本は国立図書館に厳重に保管されて誰も見ることは出来なくなる。

そのためその原本から重要な部分を除いたものが発表された。

そこには秘密にしなければならぬ重要なことが書かれていたのだ。

特に中世の魔王に関する部分だ。

口述を集めた研究結果が書き込まれていたのだ。

桔梗の日記は一躍ベストセラーとなり簡約版などが巷に氾濫した。

正確な翻訳ではないので意味不明なところは勝手に書き加えられた。

研究者は雅雄が張った防御壁を再現しようと躍起になっていた。

そのため、桔梗の日記まで調べ上げたが謎は未解明のままだ。

ただ世間には魔王のことだけが広まっていった。

そして、隠された部分は本の執筆者が勝手に書き込んでいった。

内容は魔王が出現したときそれを倒すため人類が一丸となって倒し

たというものだ。

どこかのゲームのエンディングを真似したものが好評だった。

中世の魔王物語として絵本にさえなったのだ。

桔梗の日記（後書き）

次回から魔法が出てくる予定です。

そこで目安を簡単に。

普通の魔力が無い人を1とする。

魔術師と言われる人は5〜50レベル

人を殺すだけのレベルは20程度

一流といわれるものは60以上のレベル

国一番と言われるものが100レベルぐらい

そのため力を封印するお札は100までしかない。

そして雅雄は2000レベルの予定。

どう転んでも化け物です。

魔法省の主任（前書き）

中世における魔王の秘密。

あいまいな記録が悲劇を再現に導く。

一方、わざと悲劇を再現しようとする悪の組織。

魔法省の主任

魔法省の主任

魔法大戦は指導者層の利権が原因で起きた戦争だった。

原因はどうあれ戦争に借り出された者は悲惨だった。

特に親に力のある者が居ないものは悲惨だった。

そこでひさんな目にあつた男はその恨みを子供に託した。

子供はそんな親の教育を受け立派な魔王信奉者になっていた。

反社会派のグループだ。

そして、戦争を起こしながら、なお上層に居るものに復讐を考えた。
この世に魔王を呼び出して世界を混乱させようという狙いだ。

文献を調べていくうちに桔梗の日記簡約版を手にする。

そこに書かれていた中世に魔王を呼び出した文章にひきつけられる。

魔方阵を使い魔王を呼び出そうとしたという下りだ。

結局、失敗して中途半端に終わったとある。

実際は公表されなかった部分を製作者が勝手に付け加えた部分だ。

しかし、その男はそれを信じてしまった。

その方法なら魔王を呼べると判断した。

では失敗した理由はなぜかと自分なりに考えた。

呼び出した魔王は実体が無いからではないかと類推した。

そして、日記を調べていくと魔王を呼び出して定着させる方法が書かれていた。

そのための予備の体が作られているらしいと書かれている。

想像で書かれたものが真実に近いもののかきあげていたのだ。

ただ目的は違ったのだが。

男はその体の隠し場所を探すため原本を見ようと考えた。

仲間を募り図書館を襲撃する。

集められた仲間は本当の理由は教えられなかった。というよりすりかえられていた。

政府が秘密にしている桔梗の日記原本を直接見ようという企画だ。

そしてその中に桔梗と雅雄の直接の子孫がいた。

当然桔梗の日記ということで興味を惹かれての参加だった。

本に書かれた中に暗号で体の隠し場所と解除の方法が書かれていた。雅雄に読めるようにしておいた暗号は雅雄の直接の子孫でも読めた。

ただその解読者は言われたところのみを解読した。

長い日記のすべてを読むには時間が足りなかったからだ。

小躍りする男。

それを読んだ子孫は、ようやく男の目的がわかって怖くなる。

魔王を復活させるためとは思わなかったのだ。

解読のため日記を預けられている子孫。

そして隙を見て逃げ出した。

原本を持つて警察に出頭する。

しかし、魔王を信用しない警察は相手にしない。

ただ盗難にあった原本を回収して図書館に戻した。

男は警察では駄目なので魔法省に直接直訴した。

魔法省の役人の中に若くして天才の呼び声の男がいた。

魔法省の主任待遇の男だ。

その男が偶然それを耳にした。

受付で一生懸命事態を説明しているところを通りかかったのだ。

受付の娘はどうしたらいいの困っていたので親切から引き受けた一面もある。

受付の娘が可愛かったので恩を売る機会だったからだ。

そして男から事情を聞く。

内容の重大さにようやく気付く。

急ぎ警備のものを手配するがすでに人形は盗まれていた。

その事実を知った主任は悔しさに歯噛みする。

桔梗の日記にそんな秘密が隠されていたことを初めて知ったからだ。その後、その男を使い日記を精査していくがそれ以上の秘密は見つけられなかった。

ただ魔方阵について見落としていた記事見つけた。

魔方阵を構成した部品があるという。

その当時奥義書と呼ばれていたものだ。

現在は桔梗がばらして核のような部品になっていると言う話。

ただなぜか力は感じられないのでそのほかのパーツと一緒に片付けられたという。

その情報に急ぎ調べて探索を手配をした。

そして保管してある倉庫に急行する。

しかし、ここでもとき遅く倉庫の管理人は皆殺しにあい盗まれた後だった。

犯人がどうやってそのありかを見つけたのかは不明だった。

管理責任者もそんなものが保管されていることを知らなかったぐら이다。

その事実から魔方阵の構成核の話はなにか秘密があると察した主任。これで魔王の呼び出しは現実となる公算が大きいと判断した。

急ぎ魔王に関する情報を集めていく。

しかし、桔梗の日記以上の情報は得られなかった。

すでに当時の情報を知る人も文献も存在していなかったからだ。

後は閲覧不可能な国家の機密文書だが主任の権限ではそれは許されなかった。

当時の魔王の威力はわからない。

しかし、世界は滅亡の寸前に追い込まれたことだけは真実だった。

それは、桔梗の日記以外でも確認されていたからだ。

そこまでの事実をまとめて魔法省のトップにかけあう主任。

危機感に不安を募らせる魔法省のトップたち。

対策を若き天才にゆだねた。

悪く言えばなにか問題が起きたら詰め腹を切らそうという魂胆だった。

その天才主任、任された責任の重大性に喜ぶ。

そして、当時の資料を再度調べていく。

その中には厳重に保管されていた資料もある。

本来絶対に見られない資料だ。

各国が保管していた国家機密資料だ。

魔王対策責任者としての肩書きは最優先の資格が与えられていた。

そのため、閲覧が許されたのだ。

その中には軍事機密も含まれていた。

各国の兵器に関するものは興味をそそるものもたくさんあった。

そこには訳のわからない気というものが存在しているという。

さらに、黄国の極秘資料にその気を消す技術が残されていた。

魔王はどうやら気の化け物のように感じた。

そしてその気の化け物を倒したという事実から気を消すと言う黄国の技術に着目する。

それらのことを総合して魔王を滅ぼした技術というのは黄国の技術だと確信した。

古い歴史なので年号などがあいまいだった。

そのため魔王呼び出しの年とその技術が使われた年の関係がしつかりしていなかった。

さらに追い討ちというわけではないが、

黄国の技術者はその技術の危険性を書き込まなかった。

それは失敗の歴史だったので恥を書きたくなかったのだ。

まさか、その歴史を掘り起こすものがいると考えなかったのだ。

世界は平和のうちにいつまでも続くという幻想にしばらくいられた。

だから、おおきな失敗はいつまでも人の記憶に残っていると思って

いた。

まさか、魔法大戦でその記憶が消えると思っていなかったのだ。そして、桔梗も同じミスをしていた。

黄国の技術が破滅を導いたということは知っていた。

それは有名な逸話だったからだ。

だから、黄国の名誉を傷つけることをあえて書かなかった。

その二つの暗合が主任を間違った結論に導いた。

魔王が呼び出されるまでに時間は少ない。

焦る主任はその黄国の技術を再現に踏み切る。

技術そのものは簡単なものだったからだ。

再現した技術は当時の気だけではなく現代の魔法にも対応していた。実体が不完全だったので一般には知らされなかった。

なぜ魔法が消えるのかよく解かっていなかった。

それは諸刃の剣になる危険もあったので主任の権限で発表は抑えられた。

研究機関はその解明に奔走する。

ただ結果だけを見れば魔王にも対抗できそうだと思った。

そして、魔王が出現してもこれで十分対抗できると確信したのだ。

未確認の技術なので全力テストをしなかったのが幸運だった。

もしそこでテストをしていたら悲劇はとどまることを知らなかっただろう。

その結果を見たら魔王の呼び出しは当然中止されていたからだ。

皮肉なもので魔王呼び出しの手配していたものは違うものを呼び出し。

魔王に対抗する装置を考えたものは中世の魔王ともいうべきものを再現していた。

主任はそれらの追試を指示した。

その間に過去の魔王の出現位置に興味をもった。

それは現在魔法と言われる力の源に繋がっていると確信した。

装置の作動条件に最適なのはより大きな力の発動だと言う結果だ。

そこで魔法の源をもとめる。

それはもと黄国の国境付近だった。

今でも植物が生えない不毛の大地だ。

魔王との戦場としても都合が良かった。

そこで、最後の実戦テストを行うべく実験室を移動させた。

闇魔術会

闇魔術会

闇の世界に蠢く人影

魔法が全盛の世界において闇に動く人達。

闇魔術会の面々たちだ。

現在の社会は魔法力中心の一般人には住みにくい社会だった。ただ魔法力だけで選ばれるエリート社会。

そんなものは壊してやり直そうという考えだ。

テロなどを起こすが一般人の人に賛同を得られず苦戦していた。

そんな中参加した男は数少ない仲間をまとめて案をだした。

この世に魔王を呼び出して使役させようという案だ。

初めは仲間内からも夢物語だと馬鹿にされた。

しかし、呼び出すためのアイテムを見せられたときから信用されていった。

それは、雅雄が保管していた奥義書の核だった。

きっかけは桔梗の日記だった。

その日記の簡約版を読むうちにこの中世の魔王の力を得られればいいなと思った。

詳しく読んでいくと魔方陣さえ組めば呼び出せるような錯覚に陥る。ものは試しと割と近くの廃墟に顔を出した。

雅雄が研究を行っていた場所だ。

部屋を見渡してもすでに略奪にあっているのになにもこのさされていない。

やはりと、あきらめの境地でそこを去ろうとした。

そのとき、偶然残された壁紙を視界の端に捕らえた。

壁に直接書かれたものだから誰も盗めなかったのだ。

そして、その男も雅雄の子孫の一人だった。

ただ力はそんなに受け継いでいなかった。

それでも、壁紙は反応した。

男が壁紙に触ったことに反応したのだ。

男が探すものを吐き出した。

雅雄が隠していた次元隠し金庫に納めていた奥義書のかけらを吐き出したのだ。

それは小さな竹の小片だった。

男もそんな小さな竹の小片などに価値観を持たなかった。

ただ、いわくありげに隠されていたことに興味を持った。

そんな秘密に触れたせいか俄然興味を引かれた。

その壁紙を複写して研究していく。

それは暗号で書かれていた。

それなりの素質のあった男だから解読できた。

そして奥義書の秘密に触れた。

アイテムが日記に書かれていた魔法陣を構成するものと気付いた。手元にある部品は小さなものだがそれは中世から存在しているのだ。

ただの竹の小片ではないのはすぐにわかった。

竹なのになめらかな肌触りなのだ。

いや宝石とは少し違う。

肝心なことはそれに触れられないのだ。

表面にバリアのようなものが感じられる。

ナイフで削ろうとしてみたが刃が滑るのだ。

それはそのものが不可侵のような印象だった。

バリアを研究していたものが見れば喜んだだろう。

そして暗号を解読した結果は日記の内容を証明していた。

その男はその竹の小片を研究していく。

最新の魔法を駆使して探査しようとしたのだが魔法以上の技術が必要だった。

壁紙をもつと調べていくと一連の資料が隠されていた。

雅雄が桔梗の子孫に渡そうとした資料だ。

結果的には渡ったのだからある意味正当な持ち主だ。

その資料を調べていくうちに発見したことがあった。

かつて人類を滅ぼそうとした魔王が実在していたことだ。

魔術師は六芒陣でなにかを行ったということ。

魔方阵の核にあたるものは奥義書だということ。

そう文献に書かれていたのだ。

それを配置したアイテムは力を失ってしまったという。

そのうちの一つを隠しておくと言われていた。

実は雅雄の存在自体がそのアイテムにとって障害だった。

雅雄自身がその核を持っていたからだ。

二重存在の矛盾だった。

雅雄が存在している間それらの核は亜空間に退避していた。

それゆえに桔梗に調べられたのを最後にバリアで囲って活動を停止していた。

活動停止というより確認できなかったという状態だ。

そのため、桔梗は解析したために壊れたと誤解していた。

壊れたものでも調べればなにかわかると思ひ雅雄に引き継いだ。

しかし雅雄が見る限り単なる竹の小片。

ただ回りに不可侵のバリアがはられているだけのものだった。

雅雄に核を調べることが出来なかったのはそのためだ。

雅雄が存在しなくなったことによりすこしづつ活性化していた。

男は資料にあった他の核も見つけられないかと考えていた。

すると、手持ちのアイテムから微弱だが仲間を呼ぶような信号があった。

男の考えに同調した核の行動だった。

男はそれを頼りにアイテムを集めて回った。

非合法の収集だ。

あちこちにバラバラに収められていた倉庫を襲撃して回収していく。発見されないときはいいが発見されたときは足取りを消すため皆殺しだった。

調べていくうちに研究していた者は桔梗ではないことに気付く。

それを研究していたものがいるということだった。

最初は桔梗が研究していたがそれを引き継いだものがいるということだ。

そして、その足取りを調べてこの廃墟に至ったのだ。

廃墟の中の資料を調べていくうちにわかったことがあった。

その者は行方不明になっていたということだ。

アイテムそのものはすでに集めたが使用方法がわからなければただのごみだ。

そこでその使用者の正体を探すため各地の廃墟をまわった。

その間に桔梗が隠したスピアの体も発見した。

ただ男はそれを魔王への依り代と勘違いした。

それは信じられない方法で保管されていたのだ。

次元の狭間というものらしい。

一定の手順でなければ呼び出せなかった。

出てきた人形は端正な顔にあちこち刺青をされたものだった。

そして一緒に資料が保存されていた。

ボスは持ち帰った資料を調べた。

そして、6個のアイテムと思われたものは7つ存在していたこともわかった。

残り一つを求めて再び奔走した。

闇魔術会（後書き）

運命によって引きづられるように動く闇魔術会
その動きを警戒しすぎて奔走する魔法省の主任。

次回、召喚

闇魔術会のものは雅雄の体に仕掛けを施して召喚をする。
雅雄はどうなる。

召喚

召喚

残り一つのアイテムを探す傍ら、それ以外にもやることはあった。魔王をそのまま呼び出せば中世の悲劇が繰り返される。

そのため魔王の力を封印することにした。

だが完全に封じては意味が無い。

そこで力を一万分の一にするように考えた。

とりあえずそこまで封じて必要なら解除すれば良いとかがえた。間違つて暴走でもさせたら大変だからだ。

封印の魔法は一般的なものだ。

実際にはその封印は魔法の暴走を防ぐ安全装置的なものだ。

警察などが犯罪者を収監するときなど使用している。

魔法力を100分の1にする札だ。

これを100枚張ればいかなる力でも大丈夫だと考えた。

だが男は大きな勘違いをしていた。

札には魔法力100を1にするだけの効果しかないのだ。

たとえば150の魔法力のものがこの札1枚で1.5に成るわけではない。

1枚では51になるだけなのだ。

2枚では2になる。

3枚でも2のままなのだ。

札によつて縮小された力はそれ以上縮小されなかった。

実際の魔力は100を超えるものは皆無だったのでそのようなことは知らなかった。

また、魔力封じの札は簡易に魔力を封じるのが目的だった。

だから、100分の1以外の札が存在していなかった。

術力を制限する目的など意味がないと考えられていたからだ。結果的には将来雅雄はその札を重宝することになった。

札そのものは一般的なものだった。

だから知識があれば簡単に外してしまう。

男はそのためもう一つの対策を講じた。

それゆえに魔王自身が意志を持たないように考えたのだ。

禁断の秘法というものだ。

人間の意志を完全に封じて相手を自由に操る方法だ。

これで魔王は意志を持たない人形になる。

男の意志でなんでも出来るようになるはずだった。

こうして人形の方は完全に処置した。

後は7つの部品をそろえるだけだった。

そして、7個のアイテムと人形を持ち再び廃墟に戻る。

闇魔術会の面々もそろってようすの観察だ。

そして、文献にあったように6角形に配置してそれを二重円でかこんだ。

対角線を結び星型を作る。

その中央に残った一つのアイテムを置いた。

これで術式は完成した。

後は魔法を発動すればよいはずだった。

部下達が最後の魔方陣を書き込んでいた。

だが、術式が完成したところですでに魔法は発動していた。それを作っていたものはその魔法陣から発する風？を何気なく浴びていた。

一人が仲間の頭を殴った。

少し離れたところで見っていた男。

ふざけるなと叱った。

だが直後にその者は仲間の放った火炎弾を浴びて瀕死だ。魔方阵の近くの残った4人。

お互い獣のように氣勢を上げて殺しあっていた。そして、静かになった。

騒ぐ仲間達を一言で静める男。

男はそのあまりの惨劇にあきれるばかりだった。

さすが魔王の出現する魔方阵だと感心したぐらいだ。

実際は異次元の風を受け本能に忠実に殺し合っただけなのだ。

仲間には儀式のための生贄だと嘘を言っでごまかす。

なにが起きているのか知りたいのはその男の方だが魔方阵が危ないものだとは気づく。

気を取り直して用意した人形を所定の位置に置き構えた。

次に何をするのか考えているうちに魔法陣の中央に人影が現れた。

やはり魔方阵を用意するだけでよかったと安堵する。

それとともに次に何が起こるのか不安でもある。

呼び出したものが人形に入り込めるのか不安だった。

影は予定通り人形に近づいていく。

後は寄り代の人形に意識を写せば成功だ。

人形は桔梗が作ったものだ。

200年前の技術とはいえ今より遥かに優れたものだった。

すべての技術は50年前の魔法大戦で失われていたからだ。

その成果は目の前に再現されようとしていた。

魔方阵の中央に揺らめく影は依り代に吸い込まれるように入っていく。

その魔法使いの苦心の結果だ。

少し不安があつたが人形に入ったなら成功だと確信する。

依り代の人形には制約の札を随所に仕掛けて逆らえないようにしていた。

魔王は依り代に入り込んだ。

魔術は完成した。

制約の札で力は一万分の一に抑えられている。

呼び出した魔王の意識まで封じるものだ。

当然、思考レベルも封印させたので意識はないはずだ。

これで、魔王の力を自在に使えると喜んだ。

その直後、魔術師は魔王に意識を探られ消滅した。

闇魔術会はその一瞬に消滅した。

目覚めた雅雄

依り代に吸い込まれるように入り込めさせられた。

思考の封印も完全に行われ楓の意識は封じ込められてしまった。

これから、一緒に消滅しようとした矢先の暴拳に怒りが爆発した。

そして、目の前のそれを仕掛けた男の意識を探った。

そこには封印に関して知識はあっても解除の知識はなかった。

怒りに力を振るった結果その男たちは膨大な魔力を浴びて灰になった。

雅雄の力は減らされても問題なくそれを成し遂げた。

いや逆だ。

封印が在ったから無事に済んだ。

怒りで暴発した魔力は周囲100メートルを巻き込んだのだから。

封印がなければ本人を含め、その被害はどこまでいくのかわからなかった。

こうして、雅雄は誰ともわからない召喚師によって蘇った。

楓の意識は魔術で封印されてしまったのだ。

魔術師の頭を調べた結果は最悪だった。

雅雄がもし死んでも封印は解けないものだった。
唯一の救いは永遠の眠りと言うものだ。

意識がないまま存在しているということらしい。

雅雄は仕掛けられた封印を解くために生きることを選択するしかなかった。

楓一人を残して死ぬわけにはいかなかった。

2人分の魔力が凝縮されたせいか雅雄の魔力は人間を超えていた。
通常の雅雄の魔力は50ほどだったのであきらかに何かが変わっていた。

体に貼られていた魔力封じの札は余波で半分が焼け落ちていた。

雅雄の魔力に札が耐え切れなかったということだ。

もう一つの理由もあった。

雅雄の精神が2人分だったため札の効果がなかった。

札の効果は2人に割り振られた。

札は雅雄の効果を減らした、力を1に封じて存在していた。

雅雄側の力は完全に効果があったということだ。

100枚の札のうち50枚はそれゆえに残ったのだ。

残りの50枚は効果が無いまま張り付いていたので焼け落ちた。

雅雄の力ではなく、この時点ではまだ融合していない楓の力が雅雄の怒りで発動したのだ。

だから、楓の力でも雅雄の力でもない魔力ということだった。

闇魔術会の狙い通りくぐつの力として行使したのだ。

ただ、その力が自分達に向けられた違いはあった。

崩壊

崩壊

魔王対策用の装置の実験室を黄国に移した主任、その土地を見て驚いた。

普段は立ち入り禁止になっていたから近寄れないところだ。

魔王対策の実験のため特別に許可された。

そこは、周りに生物は存在していない不気味な土地だった。

しかし、近づくだけで魔力は確実に上昇していた。

実験には最適の場所でもあった。

雑草さえ生えてないのだ。

土地そのものから生気を吸い取られた感じの不気味なところだった。

かつての魔王の威力がうかがい知れた。

このような悲劇は二度と起こさせない決意を研究員一堂がした。

魔王が出現したら確実に滅ぼす決意だった。

そして、入ってくる情報。

黒国辺境で魔法の爆発が確認された。

その威力は検知不能だという。

ついに魔王が出現したようだ。

実験の最後の詰めを指示する。

装置の全力稼働だ。

そのテストに合格すれば後は魔王との決戦に向かうだけだった。

本格的に稼働する装置。

初めは常時噴出する魔法力を吸っていくように見えた。

今までと違い近くの人間の魔法は封じられた。

その成果に満足していた一面、魔力が使えないという頼りなさも感じた。

しかし、その力は装置の管轄を離れて存在していくように見えた。主任はいまだその意味が判らずにいた。

そのため、装置の停止を指示しなかった。

やがて十分魔法力を吸った正体不明の空間は装置から離れる。

事態の異常さに気付いた主任。

魔力を吸う謎の空間は装置に依存していないことを初めて知ったのだ。

今までは装置を切ればすぐに消えた。

急ぎ装置の停止を指示する。

しかし、時は遅かった。

その空間は装置を離れ魔法の噴出し口に近づいていく。

傍目にみれば魔力を噴出する球に魔力を吸い込む球が近づくように見えた。

見守るスタッフ達。

やがて噴出し口に同化する。

いままで、魔法力を噴出していたところから魔力の吸引がかかった。簡易の装置から知らされる情報だ。

それは装置を稼働させたときとは比較にならない強さの魔力の吸引だった。

すでに周辺のものは最初の装置の稼働時点で魔法は使えなかった。

そのため現象を探索する魔法も使えなかった。

そして、体内に広がる不快なもの。

それがなんなのかわからないままだ。

勘の鋭いものは逃げ腰になっていた。

なにが起きてるのか調べようと近づいた研究員。

たちまち意識を失う。

そして、それを助けようとした者まで倒れた。

主任は一見魔力を吸い込んでいるように感じるが毒ガスの発生を危

惧する。

急ぎ部下に指示をだす。

万が一を考え腰にロープをかけ、倒れても引きずり出す準備をする。
完全装備の警備員。

慎重に近づいていく。

しかし、研究員にたどり着く前に倒れてしまう。

あわてて引き摺り出す。

事情を聞くと力が抜けて動けなくなったという。

それならと別の警備員は今度は一気に研究員を捕まえて腕を組む。

意識は無くても絡まった腕に引きずられ助けることが出来た。

同じ事をしてもう一人も助けた。

ただ研究員も警備員もそのときマスクをしていた。

作業が終わって助けられた研究員。

意識は戻らない。

治療のためマスクをとった同僚はそこで固まった。

不審に思った主任。

声をかけながら患者に近づいた。

そして同様に固まった。

自分より若いはずの研究員2人はあきらかに中年に変わっていたのだ。

事態の深刻さは助けにいった警備員にも伝わった。

そしてマスクを取ったその姿に同僚達の声が止まった。

警備員も研究者ほどではないが老化していた。

すぐにそれは近くのものに伝わる。

じりじりと後退する研究者たち。

主任が立ち上がると同時に逃げ出した。

もはや秩序は存在していない。

我先に逃げ出すスタッフと警備員。

主任は気絶している研究員をどうすることも出来ず引き上げるしか

なかった。

一方、雅雄の方

周りは灰と化していたが魔方阵は残っていた。

そこにあるのはかつて雅雄の構成部品だった奥義書だ。過去に飛ぶ前には竹の小片だったものだ。

いまは、雅雄の力に呼応して力を取り戻している。

今ならはつきりわかった、なぜあの時、力を感知できなかったのか。それを持ち上げたとき気付いた。

すでに奥義書は自分の体に組み込まれていることに。

この体がオリジナルの体ではないことを知った。

そして遠くで変化する異次元の波動。

その感覚は記憶にあった。

かつて封印したはずのブラックバーストの気配だ。

何者かが封印を壊したようだ。

今回、雅雄に勝算は無いに等しかった。

かつての気の器はこの体にはない。

封じるためのぶつける気が存在しないのだ。

絶望的な戦いに向かうしかなかった。

ただ魔力だけは十分にある。

残った札の封印は簡単に解除できた。

だがそれでブラックバーストに対抗できるかは不明だ。

おそらくブラックバーストは地上から生気を吸い上げていく。

そうなれば雅雄とて死ぬしかない。

雅雄が死ねば楓の意識は封印されたまま存続する。

失敗すれば楓は永遠に封じられたままだ。

楓の意識をいつか解放するためにはブラックバーストは邪魔者だった。

雅雄自身の生存を掛けた戦いだ。

封印するなら早い方がいい。

雅雄は再度、ブラックバーストを封じるため動き出した。

人類のためというより、楓のためといったほうがいい。

楓のもう存在したくないという願いを守るためだ。

主任は、ようやく気付いた。

中世の魔王は今、目の前の現象ではないかということ。

それではこの事態は誰にも止められないと確信した。

魔方阵を作ったものはこの魔王を封じるための魔方阵だと気付いた。

その魔方阵を構成した部品はすべて盗まれてしまったのだ。

それどころかそれを使って別のものを召喚している。

そちらも気がかりだった。

この事態を防ぐ手持ちの手段はもう存在していなかった。

それは人類の破滅をいや生物の破滅を意味していた。

事態の深刻さに急ぎ魔法省に向かう。

目の前の魔王の侵略速度はたいしたものではない。

人を助ける時間が十分にあつたのだ。

予感とも言つべきいやな感じがする範囲も確認していた。

ただ、止められないだけだ。

せめてそれだけでも魔法省に報告しておかなければという義務感だけだ。

主任から事態を聞いた魔法省のトップは自身の保安を優先した。

国が滅ぶのはもっと先だと言う報告に事態の破滅は次の代だと思つたからだ。

そのため事実を隠蔽しようと画策した。

今回の現象は無害でただ魔法力の吹き出しが止まったただけだと発表した。

最初はその情報を信じた人々。

だが冷静な対応をとる前に事態は最悪の事態に陥った。逃げ出した者達はその事態を吹聴したからだ。

目の前で若者がわずかの間に老人に変わったのだ。

そのニュースは民間の放送機関から流された。

政府の発表は最初から信じられなくなっていた。

最初はたいした問題ではないと嘘を発表したからだ。

事態の深刻さをごまかそうとしたのが裏目に出た。

ようやく気付いた政府高官たち。

あわてて真実を発表したが、とき遅く誰もその発表を信じない。

現実にはそんなに焦る事態ではなかった。

広がる速度は微々たるものだったからだ。

主任が計算したところでは世界が滅ぶまで100年かかる予想だった。

だが最初の発表から誰もそれを信用していない。

目の前で見た異状事態の説得力に人々は最悪の事態を想像した。

桔梗の日記の簡約版が広まっていたのも原因だった。

もう誰も疑ってなかった。

それが中世の魔王だということを。

そして、それを倒した勇者はもうこの世に居ないことも知っていた。

あとは魔王に滅ぼされるだけだ。

それがいつになるかわからない。

その考えは人々を刹那的な快楽に走らせることになった。

最初は仕事の放棄、逃走から始まった。

最後を迎えるなら家族と一緒に考えだ。

そして、生きていくためにはまとまった物資がいるということ。

政府が消えれば金は意味をなくす。

必要なのは現物だ、物資の奪い合いが始まった。

あちこちで広がる暴力事件。
身を守る人々の過剰な魔法攻撃。
秩序ある世界は数日で崩壊した。

主任は自分のしたことに責任を感じていた。

ふらふらと屋上に向かう。

それを見る受付の女の子。

従兄弟からの電話を受けたところだ。

おかしなようすの主任を追いかける。

主任は崩壊する街を前にして手を頭に当てる。

魔力を手先に集め発動しようとした瞬間そらされた。

受付の女の子だ。

「やめてください」

しばらく屋上でもみ合った。

「君は？」

「猪夏美といます」

受付をやるぐらいの美人だった、だから彼女の気を引こうとして事件にかかった。

「なぜ、たすけたんだ」

「責任を取るなら復興に力をそそいでください」

「でも」

いまさら復興と言われても意味が無いように思った。

「私は救世主を助けにいきます」

そう言って振り向いて去っていく。

「救世主……」

主任の瞳にわずかな力が宿った。

崩壊（後書き）

仕事が忙しくなってきた小説を書く時間がなくなりました。
また時間をかけて考えてきますのでしばらくお休みです。

次回、最終回。
決戦です。

対決 最終話（前書き）

因縁のブラックバーストとの決戦。
それを助ける縁の6人。
ついに決着。

対決 最終話

対決

雅雄はまず近くにおいてある奥義書の残骸を回収する。

当時では判らなかつた謎がすべてわかつていた。

奥義書は壊された時点から防衛機能が全開になっていた。

傍目には滑らかな瑪瑙のような印象だ。

その外側を気によって固めていた。

これを物理的に破るのは不可能だ。

あらゆる力は異空間に流されていくからだ。

今の雅雄なら封印を解くのは簡単だがそれを解けば劣化が始まる。

戦いの最後まで力を温存しておきたい。

そのためそのまま持ち歩くことにした。

当時雅雄に奥義書を書き込んだとき奥義書が壊れたように感じた理由も判った。

二つは同じものだったので片方は存在のみになったのだ。

あのとき桔梗は解析できたのに雅雄が出来なかつた理由だ。

今ならその事情もよくわかつた。

男の知識を吸い取った結果近くに町があるという。

歩くと数日かかるということだが、手段がないので歩くだけだ。

歩きながら景色を見ると記憶にある景色とずいぶん変っていた。

魔法大戦の傷跡のようだ。

星を落としたということらしい。

男の知識でもその辺はわからないようだ。

町に近づくにつれてその異常さがわかる。

住民同士が争っていた。

穩行かけて近づく。

雅雄が出現して三日だが魔王の出現に自暴自棄になっている。盛んに魔王に滅ぼされるという言葉を聞く。

男の知識では魔王というのは雅雄のことらしい。

詳しい事情を知るため気の解放を行った。

その一瞬、気の器が無いことを思い出した。

しかし、術は発動した。

範囲は町全体だった。

その威力に雅雄自身が驚く。

そして、その力を持続していることに。

器が無いのに気を使えるのだ。

理由はすぐにわかった。

雅雄自身の刺青と所持している奥義書が力の源だった。

とりあえず一人づつ主だったものを解凍して事情を聞いていく。

解凍されたものは雅雄の力に逆らう気力はない。

問われることを答えていく。

そこで判ったことは魔王というのはブラックバーストのことらしい。

男の知識とかなり開きがあった。

理由さえ判れば強力な暗示をかけて一気に解凍する。

今まで戦っていたものはなぜ戦うか理由がわからないのですぐに戦闘終了だ。

こうして魔王雅雄に襲われた町から戦いは無くなっていく。

いつのまにか雅雄は人々から救世主と呼ばれるようになっていた。

助けられた人の中に猪家ゆかりの者がいた。

男は一族最強の姫に連絡を入れる。

魔法省に働く娘だ。

桔梗の日記を読めば救世主を助けるものが必要だ。

そのため連絡をしたのだ、救世主を助けてやって欲しいと。

魔王の出現に対抗して救世主出現の報は人々を自暴自棄から目覚めさせる。

発信源は魔法省だった。

あらゆるメディアを使つての報道だった。

首を覚悟の主任の働きだ、あらゆる伝を使つて報道した。

急速に静まる戦いの気配。

ようやく人々は政府の発表を冷静に聞くだけの余裕が生まれた。だが壊れた街の復興は進まない。

確かにすぐに滅びることは無くても結局滅びるのだ。

再建するのは無駄のように思えた。

そんな中、高まる救世主への期待。

力の強いものは救世主を助けようと雅雄の下へと移動する。

雅雄はブラックバーストを封じるため仲間を募った。

魔法力の強いものだ。

戦いは一人では無理だ、前回同様、力の支援が必要だ。ブラックバースト周辺では力の補充が不可能だからだ。そのため奥義書を介して補充していた。

魔王を倒すと聞いてしり込みするものが多い。

その中、勇気をふりしぼつて名乗り出たものがいた。

あまりに多かったので最後は魔法力で選別した。

そして六芒陣を作るため6人に限定した。

のちの六家の祖先にあたるものだ。

面白いのはやはり奥義書の持ち主の本家だったものだ。気の力の強いものは魔法も強かったということらしい。その中に夏美ももちろん入っていた。

狼家兄妹もいたが、妹は選考からはずれていた。

雅雄は奥義書の核を渡しブラックバーストを囲むように指示をだした。

各人は個々の才覚で動き出す。

場所を決めたら現地で集まって最後の打ち合わせの予定だ。

あとは雅雄の決意だ。

今回は未来の保証があった。

今回は生存の保証はない。

戦いがどのようになるか判らない。

前回なぜ封印できたのかもよく判っていない。

同じ手段を使うには気の器が無い。

そのため、できるだけ知識を集めていく。

膨大な知識の中に面白いものをみつけた。

空間修復の技術だ。

分野は医学だった。

奇しくも麻薬の治療法だった。

そう、あの中世の麻薬と同じものが魔法で作られていた。

人間の意識を異次元に繋げ幻覚を見せるものだ。

重傷になると常時つながり続け発狂するものだ。

その治療方法に使われる技術だった。

ただ、問題は修復の穴の大きさだった。

その治療法では極小の穴だ。

これからふさぐのはとてつもなく大きな穴だ。

はたしてうまくいくのか？

すでに仲間は動き出して陣を構成にかかっている。
迷っている暇はなかった。

その治療法の習得にかかる。
雅雄の経験と知識でそれは瞬く間に完成する。

そして、ついに現場に到着する。

雅雄を待つ6人。

その頃には崇拜に近い形だ。

ブラックバーストの現状をみてそれと戦おうという雅雄に対する評価だ。

それほどブラックバーストは異様なものだった。

観測に来たと思われる人の死体がある。

老人になって死んでいるのだ。

不用意に近づきすぎた者たちの末路だ。

そこに自ら飛び込んでいく雅雄の決断に対する評価だ。

雅雄は6人に指示をだす。

そして核の封印を解いた。

それを持つ6人の魔法力は一気に跳ね上がる。

その事実には驚く6人。

ただでさえ核を持つだけで力が増していた。

それが、封印されて弱められていた事実には驚いたのだ。

各人は所定の位置に散っていく。

雅雄は手持ちの核の封印を解く。

膨れ上がる魔法力。

そして気による防御結界を張りブラックバーストに近づいていく。

固唾をのむ政府の観察者。

結果を今度は正確にみんなに知らせる覚悟だ。

雅雄はブラックバーストの中心近くまで侵入する。

そして、修復術を開始する。

やはり穴が大きくて意味が無いようにみえた。
魔法力はどんどん吸い取られていく。

体から力が抜けていく感覚だ。

魔方阵からの支援があつてさえそんな状態だった。

一度引き上げて作戦を練り直そうかと考えた。

しかし、離れるにしてもすでに限界に近い。

それほどの勢いで魔力を吸い上げていくブラックバースト。

雅雄にして迷った分だけ手遅れになった。

もはや逃げることも許されなくなった。

さいこの力で修復を続行する。

苦しい戦いの最中、心のどこかで楓が微笑んだ気がした。

そのことに考えが行き、一瞬心を空白にしてしまう。

吸い込まれる寸前、危ないと気づいた。

ひやりとしたのは一瞬だ、しかし次の瞬間からどこからともなく力が湧いた。

そんなとき、さらに思わぬ援軍が登場した。

雅雄の危機に異次元に漂っていた雅雄の気の器が再び現れた。
ブラックバーストそのものをぎりぎりで抑えていた気の器だ。

新たな穴の追加で異次元側に漂っていった。

それが、再び穴に重なる。

そして、穴のほとんどをふさぐ形で収まる。

器の限界ともいえる。

残った隙間は小さなものだ。

雅雄の修復術でふさぐことができた。

すると、器はさらに小さくなる。

まるで雅雄の能力を知っているがごとく塞げるぎりぎりの大きさだ。
再び修復術でふさぐ。

その繰り返しだ。

やがて最後の小さな穴をふさぐ寸前、気の器は消滅した。
そして、ブラックバーストは消滅した。

そして雅雄は気付く。

気の器はかつて雅雄が体内に持っていたものだということを。
雅雄の分身に近いものだ。

長く雅雄と同化していた気の器はすでに耐久寿命を越えていた。
その上、長い時間異次元との境を守ってきた。

その器はもう雅雄と同化するだけの耐久性はない。

そのため雅雄に協力する形で消滅したということ。

そこに意志のようなものを感じた雅雄だった。

最後の一瞬、楓からのありがとを聞いた気がしたのだ。

雅雄にして力を使い果たしてその場に座り込んでいた。

すると核を持った6人が近づいてくる。

ブラックバーストの禍々しい気配が消えたので雅雄が倒したとわかったからだ。

その場で雅雄は新たな指示を出す。

その核を守って子孫に伝えるようにとだ。

もう二度とブラックバーストを出現させてはならないことを。

命令を受けた6人その指示を忠実に守っていく。

その後、この6人は救世の六家とよばれた。

雅雄自身はこの事件のあと、市井に身を隠し行方不明となる。

身を隠すの大いに役立った封印札だった。

傍目には6人を隠れ蓑にとんずらしたというのが正解だ。

事実、英雄に祭り上げられた6人は寝る間もない忙しさだった。

そして、復興の中心的存在となっていく。

蛇足

雅雄はブラックバーストの封印のあと、六家のものに指示をだした。その後、力が抜けて呆然としていたときだ。

楓の存在そのものが消えていることに気づく。

やはり、あの一瞬に感じたものは気のせいではなかった。

楓の管理分の力を雅雄に託して楓は器に意識を移したようだ。最後に楓に助けられたのだ。

それでは、もはやこの世界にとどまる意味はないと感じた。楓と同様消えようと考えた。

人間とは違うので死の概念は無い、強いていうなら消去だ。

そのとき、飛び込んできた娘。

六家の一人、狼家の娘。

桜というものだ。

雅雄の態度に違和感を感じて飛び込んできたのだ。強引に雅雄を連れ出していく。

兄から頼まれた一面もあるが、桜自身興味もあつたからだ。

雅雄自身、初めて出会った桜に既視感が重なる。

楓の面影、森で初めて会った桜の雰囲気などだ。

桜は兄に頼んで雅雄を隔離して行方不明にする。

桜の説得に消去を思いとどまる雅雄。

その後、ひきずられるように結婚。

幸せな時を過ごしていく。

器をなくした雅雄は他人と同様年をとっていく。

そして、今度こそ天寿をまっとうした。

最後の奥義書の核は桜と雅雄の息子が所持することになった。

対決 最終話（後書き）

ここまで読んで下さった方ありがとうございます。
応援、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7984k/>

雅雄記？

2010年11月17日03時22分発行